

週刊新潮4月6日号・3月30日発行の『注目の名医 第91回 スペシャルインタビュー』に、  
当院の院長浅見哲先生が取り上げられました。 4/6号（2023年3月30日発売）



愛知県・大府市 時代に適した地域医療と最先端の医療体制

眼科医療の最前線で、難病患者の社会復帰に努める  
眼科手術の専門医による最新鋭の手術機器とハイブリッドの手術技術を提供

## 浅見眼科手術クリニック 院長 浅見 哲 医師

2021年の夏、愛知県の大府市に開院した「浅見眼科手術クリニック」。院名に「手術」と付くのは非常に珍しいが、その名の通り、眼科手術を専門的に手がけるクリニックだ。恐怖感がつきまとう2文字を取って前面に押し出した背景には、浅見哲院長の強い想いがあつた。

年間1300件以上の手術を  
一手に担うスペシャリスト

名古屋駅から電車で15分ほどのJR「共和」駅から徒歩1分。便利な立地にある浅見眼科手術クリニックでは、20年以上のキャリアを誇る浅見院長自身が年間で何と1300件を超える手術を執刀する。それだけの手術をこなしても約3か月待ちと予約が殺到していることか

ら、この3月からは外来診療枠の一部を手術に充てることにしたという。

周辺のクリニックや病院からの紹介さらには県外から来院する患者も多い同クリニック。一般的な白内障手術はもちろん、網膜剥離や眼内炎といった緊急疾患、緑内障や糖尿病網膜症、黄斑上膜など一般的な眼科診療所では難しい手術にも積極的に対応する。

研修医時代から眼科医を強く志望したという浅見院長は、

米国で最新の眼科治療を学んだ後、名古屋大学医学部附属病院の医局長や県内複数の眼科専門病院の副院長などを歴任し、無数の手術を手がけてきた。「大病院は、関連病院から緊急の患者様が昼夜を問わず搬送され

三重大学卒業。2004年に名古屋大学医学部大学院を修了し、医学博士を取得。名古屋大学附属病院、豊橋市民病院、眼科三宅病院などを経て、21年7月から現職。一貫して眼科の手術を専門とした診療を行なっている。

てきますから、とにかく無我夢中でした。クリニックの開設にあたっては、外来を主体にするのが無難なんでしょうが、せっかく独立するならば自分の専門性を活かせる理想の眼科治療を目指そうと考えたのです」（浅見院長）

すべての患者が心から納得し  
すすんで手術に臨めるように

日本における失明原因の第1位である緑内障は、早期発見ならより広い視野を残すことも可能。だが、手術の場合は一度で終わるとは限らず失った視野が戻ることもないため、患者の満足度は高くない。また、緑内障は視野が欠けているという実感が薄いことがある。自覚がないのに手術を勧められても抵抗を感じるのには無理もない話だ。そこで、まず検査結果や現在の病態、重症化リスクなどの告知を徹底。大型モニターを使って細かく説明し、理解が不十分のまま「お任せ」にならないよう気を配る。

検査には網膜光干渉断層計、手術には3次元映像システムなど最新鋭の機器が揃うが、それ以上に印象的なのが患者への配慮だ。総合病院のハイブリッド手術室に時に見られる、心理的負担を感じにくいような鮮やかな色合いの

ガラスの壁、術中には患者が好むジャンルの音楽も。また、待合室にはホテルで使われる照明器具やアロマオイルをリサーチし、何と白い小型グラウンドピアノまで設置。音大生を含む3名のピアノリストに交代で生演奏を提供してもらうなど、癒しの空間を作り上げた。

患者想いの極め付きが、誰もが恐れる「痛み」の管理だ。手術では、まず目薬を十分に効かせてから白目に、さらに目の奥に、と順番に麻酔をかけるため、多くの場合はほとんど痛みを感じない。それでも術中に違和感を覚えた場合は、たとえ本人が我慢していても小さな反応を見逃すことなく麻酔を追加するなど、細やかなケアを実践する。

ほとんどすべての疾患にワンストップで対応できるだけに、「大病院に紹介状を書いてもらった時のように、心からご信頼いただけるクリニックにしたかったのです」と浅見院長。院名の「手術」の2文字は、自らが半生をかけて積み上げた経験をひとりでも多くの患者に活用して欲しいという信念の証なのだ。

## 浅見眼科手術クリニック

<https://asamiganka.com/>

診療時間 ◆ 外来 9:00~12:00(月~土)  
16:00~17:30(火のみ)

休診日 ◆ 日・祝日・第1土曜・第3木曜

※手術は月・金の14:30~、水の10:00~  
火の14:30~16:00です。

所在地 ◆ 愛知県大府市東新町2-165

電話 ◆ 0562-46-7700

浅見眼科手術クリニック

